明治期の能楽における交流と創造―演者の移動による伝承の確保－　　要旨

奥山けい子

この論文の目的は明治維新後に能楽の地域伝承が生成した新しい基盤を解明することである。研究の対象は、19 世紀後半から 20 世紀初めの、東京と他地域の能楽の演者である。論文は能の演者の移動に注目し、地域間の関係、交流と創造の過程、技法と表現を明らかにする。主な資料は能楽関係者の著作、能楽関係雑誌、新聞、演能番組の記録である。

第 1 章は明治維新によって衰退し、その後復興した東京の能を取り上げた。明治期の東京の能は衰微していたが復興し、上京する能役者が続出した。また能楽社が開設され、芝能楽堂が建設された。しかし囃子方の生活は全体として苛烈であった。池内信嘉が上京し、雑誌『能楽』を発刊し、能楽倶楽部を設立した。1912 年に東京音楽学校が能楽囃子科を設け、囃子方養成が国の仕事となった。

第２章では明治期の松山と金沢を取り上げた。松山では旧藩主の東京移住や家禄奉還に伴い、能役者が勧進能を行ない、装束を東雲神社へ奉納した。東雲神社で定期的な能が行われ、優れた役者が育ち、見所は士族の家の社交場となって、文学者の感性や知性を形成する土壌になった。松山能楽会が発足し、他地域から役者が来訪して催能があった。松山では明治期に囃子方養成の事業が行われた。池内はこの経験を東京に持ち込み、能界以外からひろく人を募集する養成制度を始めたと推定される。

金沢は江戸時代以前から能が盛んであった。明治期も多くの神社で演能され、謡の会である氷室会が盛んに行われ、参加者の中から優れた役者が育ち、能楽雑誌が発刊された。金沢では、石川県能楽会、金沢能楽会が設立され、能楽師たちは有力者の支持を得て能を振興してきた。

第３章では、青森市に能の文化が育つ過程を検討した。明治初期の青森市は、市民の多くが能を知らない土地であり、転住者の梅原が青森で能楽を習った師匠は金沢、津軽、会津、豊橋、東京など、他地域出身者である。謡曲愛好家集団は転勤者の懇親集団ともなり、また俳人のつながりと一部重なっている。青森市の謡曲愛好家は県内各地と接触し、協働している。会津の人々が多く青森に在住し、謡曲を普及している。高安流が衰微し、宝生流と観世流が伸張して、流儀の分布地図が変わっている。これらの特徴は青森市が行政の中心地となったこと、弘前が県庁所在地でなくなったこと、戊辰戦争後の斗南県設立に関わる。青森市の謡曲愛好家集団は村落共同体でなく都市に基礎を置き、交通の要衝であることを生かして活動した。

第４章では東北地方の歌唱様式である御祝を取り上げた。御祝には民謡と謡を合わせる様式が諸地域にあり、男声の小謡と女声の民謡を同時に唱和する例が、氷口近隣にある。この地域で、同時併置形式の御祝は生まれ広がったのであろう。明治維新によって、能役者が村落に活動領域を広げたことが、小謡の隆盛を東北地方にもたらした。そして小謡は儀式の声楽の種目の一部と意識され、新しい演奏様式の創出、すなわち小謡と民謡の順演型の御祝と、同時並置の御祝が行われ、現代音楽にも影響を与えた。

第５章では黒川能の出張公演の記録「他村ニテ執行能番組」を取り上げた。公演の月は冬季を除くすべての月にわたり、素人の集団とは異なる。公演地は庄内地方全域や山形県、新潟、宮城、東京である。これらの公演の目的は、建築関連の開始に関する儀礼、集会、法会、興行、個人と人名を冠した店・医院、社寺な

どである。演目の特徴は、祝言や悪を討つ内容の能が多い。公演地の中に黒川が能や謡を教授した地もある。

黒川能の自己同一性に関わる役者自身の発言の記録として、1901 年東京公演の際に、観世流の能と同等とみなす発言がある。黒川能が成立して以来、外部からの好評、伝統の墨守、「大内掛り」という定義、固有性の認識という自己認識の歴史的過程の上での発言と思われる。元禄期以来、優劣、新旧、様式、舞台作法の謹厳、巧拙というさまざまな基準による評価が、異なる立場から行われてきた。しかし外部評価に歴代接し、また庄内地域の演能諸集団と並び立つことによって、黒川能は固有性を確認してきた。その背景に、出張公演の実績が存在すると思われる。

終章では次の点を指摘した。旧城下町の東京、松山、金沢では、明治期に舞台整備、能楽の組織作り、謡の人気という事象が起こった。地域間の交流による新しい基盤の創造は、人材の供給、新しい組織、養成制度として現れた。また新都市における謡曲愛好家の組織形成も新しい基盤である。村落社会における能文化は歌唱の新様式や独自の技法を創造した。